

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第197号（2022年10月）

常世の風に吹かれて呟いて（5） 白井啓治

（白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を

抜粋して連載します。）

『朝焼けに名月の頬ほんのり茜さし』

（2012年10月1日）

台風のおかげで昨夜は中秋の名月を眺める事が出来なかった。

早起きは三文の徳とは言いが、今朝は五時前にお犬様に起され散歩に出かけたのであった。風もなく空は雲一つなく晴れわたっている。三時ごろまで吹き荒れていた風はいったいどこへ消えたの？

東の空がようやく朝焼けってきている。西に目を移すとそこにはまん丸の残月が居て、明けの茜にうつすらと頬を染めてくださった。ご機嫌なお犬様は、残月に向かって走り出す。気持ちの良い朝は必ずスタートダッシュをするのである。ETでは夜空に向かって飛び出すのであるが、今朝の吾等は茜さす残月に向かって飛び出す勢いである。

僅かのダッシュに息を切らし、愛々ちゃんゆっくり行こう、とリードをひくとちよつと不満そうな顔で振り返るがすぐに小生に付けをして歩調を合わせてくれる。明けに染めた中秋の残月がホッコリと笑って見えた。

『一つ大騒ぎが終わりホッ！』

（2012年10月6日）

慌ただしく大忙し（東京公演の打ち合わせ）の間。ようやく一区切り。しばしの時ホッ：である。

午後、突然の大雨。しばし昼寝と、寝転がるとお猫様とお犬様が早速やって来る。二人を量の脇に寝かせ何だか久しぶりの昼寝の気分。洗濯物が乾かない。良しさそんなこと。二人の体温に暖められ何時しか夢枕。



（絵： 兼平智恵子）

ああ、幸せってこういうことを言うのだろうか。お猫様の呼ぶ声に目が覚める。煩くまとわりつくのでエサか？と食器を覗くと綺麗になくなっていて。どうやらお犬様が盗み食いをしたらしい。お猫様は、時間を決めて食事するのではなく、気分次第に食べるので、食器の中には何時も切らさずに入れておかねばならない。だからといってお猫様の一日の食事の量は一定で、食器に入れたら全部食べるということはない。お猫様はもう老

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

女で上下の奥歯が無いのであるが、頑としてドライフードしか食べない。気が向いた時に一口カリカリと口に放り込み水を飲んでお終い。それを一日に何度も繰り返すのである。

だからお猫様が食べようと言った時にフードが入っていないと大騒ぎなのである。

最近、よくお猫様がエサがないと呼びに来る。お猫様の食器を見ると、お犬様がやって来て失敬するのである。お猫様の食器だから小さな食器なので、お犬様が一口舐めるとあらかたのえさが無くなってしまっている。お犬様も食べたくて失敬するというよりは、何となく食べてみたいようである。時々、お猫様に見つかってパンチをされている。

今日のお犬様、気付かぬふりをして片目を開けてお猫様のえさを入れてあげているのを盗み見ている。今週初めて太平を思う。

悪路狼夢（オロロム）の歌 I

兼平智恵子

ふるさと風の会では、平成二十年代に「ことば座」として故白井代表による朗読と手話舞の小林幸枝さんにより朗読舞劇を年一回又は二回公演していました。この公演の幾つかを紹介しております。

今回は悪路王と称する形相恐ろしき人間頭部の木彫が茨城県城里町高久の鹿島神社と鹿嶋市宮中の鹿島神宮にそれぞれ一体伝わっています。

「悪路狼夢の歌Ⅰ」として白井代表の（悪路狼夢の歌、創作メモ）から、そして来月号は「悪路狼夢の歌Ⅱ」として朗読の白井代表と手話舞小林幸枝さんにより朗読舞劇と二回にわたってご案内します。

はじめに

（悪路狼夢の歌 創作メモ）

常陸国風土記では、鹿島を「香島」と表記してあるが、何故かそれは風土記にだけで、あとは全て「鹿島」の字が当てられている。常陸国風土記に書かれている香島であれば、鹿島神宮は香島神宮でなければならぬはずであるが、その形跡は見当たらない。

各国の風土記の編纂は大和朝廷からの詔（命令）によってなされたものであり、そこに書かれた名称等の表記、ある意味政策的なものが絡み、ある種絶対命令的なものがあるのであるが、鹿島は香島とはならなかったし、一宮である鹿島神宮も「香島」神宮とはならなかった。

下総国の一宮である香取神宮の祭神は、経津主

神であり軍神である。鹿島神宮の祭神は武甕槌命を筆頭に、香取神宮と同じ経津主神、天児屋根命が祭られており、朝廷の威信をかけるべく軍神である。であれば、鹿島も元々は鹿島であつても風土記に表記されている香島に直されるべきものである。にも拘らず鹿島は風土記にしか「香島」と表記されなかった。

何となく物語の臭いがする。それで、少し調べを進めてみたら、大和民族なる侵略者が来るまでは、その地は「シカシマ（鹿島）・カムイ（神）」のおわす所であつたという説に出会つた。アイヌ語のシカシマを鹿島と表記したが、それが訛つてきて「カシマ」と言うようになったらしい。

なるほど、それで物語の臭いがしたのかと思ひ、もう少し資料を眺めていたら、鹿島神宮に「悪路王」と称される蝦夷の頭目（とうもく、かしら）の首の木像が奉納され、宝物館に展示されてあるということを知つた。さらに、その「悪路王」なる人物の首の木像は、桂村（現在は城里町）・高久の鹿島神社にも社宝として安置されているのだという。

悪路王は、坂上田村麻呂と戦つて敗れた蝦夷の長「アテルイ」であるとも言われているが、確かな事はわかつていない。悪路王が坂上田村麻呂に敗れたアテルイだとすると、アテルイは京に連行され、八〇二年に河内で斬殺されたと記録されている。しかしそのアテルイが果たして悪路王なのかはわからない。

また一説には、悪路王は大陸系の漂着民族と思われるオロチヨン族の首領で、悪路の主（おろのぬし）とも言われている。

さて、悪路王の実態は定かではないのであるが、

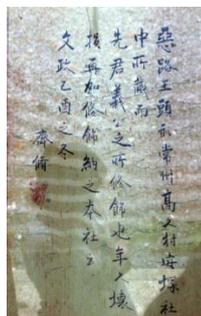
大和民族の敵であることには違いない。その大和民族の敵である者の首の彫り物が何故、鹿島の神に奉納されたのが不思議であり、面白いところである。

鹿島神宮の祭神は、武の神である武甕槌命（たけみかずちのみこと）であり、蝦夷征伐に向かう者達が遙拝したり参拝に訪れたりした。それで、その戦勝報告として奉納されたということに、一応はなっているようである。特に高久の鹿島神社の頭彫は、始めは塩漬けの生首であつたが、後に木彫に変わったとも言われている。木彫に使われている頭髮は、確かに人のものだという。

しかし、高久の鹿島神社にある悪路王の首像は人形浄瑠璃か屋台のからくりに使われていたものらしく、裏側がくり抜かれており、眼球が上下に動き、表情を作る仕組みになっている。どうやら、謡曲の阿黒王か何かの人形芝居にでもつかわれたものと思われる。



高久鹿島神社の
悪路王像



徳川斉治の墨書

高久の鹿島神社は、七八一年の創建であると伝えられているが、悪路王をアテルイだとすると、創建後、約二十年に祀られたことになる。祀られ

た時は塩漬けのミイラ化した生首であったという
がそれがいつ頃に木彫化されたのかは記憶もない
し、解っていない。

この木彫は、徳川光圀の目にとまり、元禄六年
(一六九三)に修理させたという記録が、彫刻を
納める木箱の内側に記されて、残っている。また、
さらに時代がさがって、文政八年(一八二五)に
修理したという意味の墨書も残っている。

鹿島神宮に祀られてある悪路王の木彫は江戸時
代前期の寛文四年(一六六四)に、奥州の藤原満
清なる人物が奉納したものと伝えられているが、
藤原満清なる人物が何者なのかは全く分かってい
ない。



鹿島神宮の悪路王像

悪路王とは何者なのかは全く分かっていない。
しかし、蝦夷に深く関連していることだけは確か
なことである。実に謎めいた、わくわくする物語
の臭いがする。 白井啓治 創作メモより抜粋

東茨城郡城里町の「公報しろさと」によりまず
と高久の鹿島神社の社宝として伝来してきた「悪
路王面形彫刻」は昭和四八年一月二〇日町指定文
化財に指定されました。由来については諸説あり
ますが、

延暦年間坂上田村麻呂将軍が蝦夷征伐の折、陸奥

国平泉の達谷の窟(一説に下野達谷窟)で蝦夷の
首領アテルイ(悪路王)または高丸(悪路王)と
もいわれている者を誅(ちゆう、攻め打つ)し、
凱旋の途中この地を過ぎ、携えてきた首級を納め
た。最初はミイラであったが、これを模型とした
ものと伝えられている。また、地元では、神社
の西北100mにある休塚(安塚)を、「田村麻呂が軍
を休めたところであり、アクラオウ(悪路王)の
首を埋めたところ」と言い伝えられている。
制作年代は不明ですが痛みがひどく元禄年間、
水戸藩徳川光圀によって修理が施され、さらに一
三二年后、八代藩主斉脩(なりのぶ)が再び修理
を行い、面形を納める厨子の内部に修理銘を残し
ている。

現在面形は茨城県立歴史館に寄託・保管されて
います。鹿島神社には復元した精巧な複製の面形
が納められ、毎年旧七月一〇日の虫干しの神事で
一般に公開されます。

城里町教育委員会にお聞きしましたところ、こ
のところコロナ感染防止のため公開中止となっ
ており、来年の公開についてはお問い合わせ下さ
いとのことでした。

そして鹿島神宮の悪路王の首(木製)は江戸時
代に奉納されたもので、昭和四九年発行の鹿島町
史 第二巻には寛文四年に奥州の住人、水谷加兵
衛満清が奉納したものであると記載されており、
奉納の経緯は不明という事です。

境内の宝物館にては十年前に見学し、険しい顔
つきに圧倒、今回の紹介に当たって参考にと八月
二十九日に参りましたが宝物館修復中の為再会す
ることはできませんでした。

念のため現在宝物館は休館中です。

○ あたたかなほほえみとやさしさを
黄泉の国から降り注いで下さい 智恵子



(ちえこ)

我が人生の回想9

木下明男

高校卒業から成人へ・・・？

企業の養成所を卒業(修学旅行まであった)し
てから現場配属、そして高校卒業(成人)まで
年間。まじめに上野駅から学校まで徒歩10分を通
った。学校は殆ど休まなかったが、校門前でタバ
コを踏み潰す不良少年、授業の中休みには屋上で
「プカプカ・・・」それでも真面目に勉強してい
た。卒業と成人・・・今後の生き方について思案、
養成所の仲間や学校の同級生たちは大学進学や他
社への転職、能力的には会社に残り無難に過ごす
のが無難等選択肢は色々。結論として取り敢えず
大学受験を選択する。理系は自信がないので、文
系を選択(試験科目が少ない)したが、英語は全
く自信がない。英語を捨てて歴史と国語に掛けた

が、最低点制度（トータルで合格点に達しても各科目で20点以下があると失格）があることを失念結果は不合格。再挑戦のため、英語力をつけようと新橋にある米会話スクールに通う。僅か3ヶ月で、お酒と麻雀等遊びの誘惑に負けてしまった。麻雀は強くなり、給料分を稼いだこともあった。

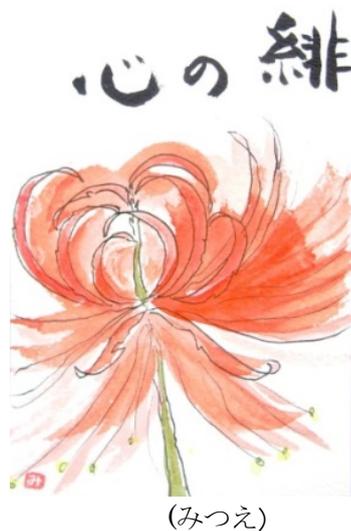
1960年代の半ば、安保闘争などもあり労働組合は強く、各労組や国公労組等が頻繁にストを行っていた。経営者側は、此の頃より反撃を強め職能給を導入し、活動家排除を始める。会社内の組合を分裂させ、経営の言うことを聞く組合（御用組合）作りで分断を図る。成績差別により、経済的に出世的に格差をつけの支配が始まる。当初少数だった御用組合は、露骨な支配介入により多数組合になる。組合の幹部は、その功績により後に大出世を……。組合の分断は、友達・親子・恋人・兄弟・夫婦等の人間関係を壊し、自殺者や多くの退職者が……。社会は1964年のオリンピック景気……。テレビ（カラー）や便利な家電が普及していった。目標がなくなり、日々漫然と享楽に……。徹夜マージャンからの出社、毎日飲み歩き、ストリップ通い等々墮落の生活だった。私は組合活動や青年サークル活度なども縁が無く……。そんな時、女性先輩から労音のサークルに誘われた。どうせ暇だからと誘いに乗り、勤労課扱いで労音潰しに導入された音協（民主的な労音）音楽鑑賞組織に対抗して、経団連が作ったとの競り合いが始まる。数百名もいた労音云員は、100名以下になっていた。其処で職場巡りや、週一で機関紙を作り企画情報の宣伝、サークルでレコード鑑賞会や歌声でコーラスを……。若い男女の出会いの場として、サイクリングや山歩き

海水浴などを開催、多くの仲間を誘う。一時的だが2、300名くらい迄復活させた。

職場での労音サークル活動を数年続ける、すると労音の地域組織（品川地域委員会）から、会社でのサークル経験を聞かせて欲しいとお誘いが……。会社しか知らなかった私は、興味深く感じ地域の集まりに出かける。其処には、20人近くの人たちが集っていた。品川区内に働く色々な会社の人たちだった。区役所・郵便局・銀行員・看護婦・幼稚園保育園の保母・大企業の社員・印刷会社・中小企業の社員・個人事業者等々職種は様々、会社以外の人と話すのは初めてだった。地域でのコンサート活動、会場をいっぱいにするため様々な集い、話し合いで職場訪問を企画。そして地域例会（小会場コンサート）高石ともや・岡林信康・新谷のり子・横井久美子等）を成功させたときの高揚感を味わう。此の頃東京労音には数万人の会員がいて、都心と東西南北（私たちは南部ブロック）の区域割をして地域ごとの特徴ある活動を展開していた。年2回（夏）キャンプ／冬（スキー）友好祭として全体でイベントを行っていた。其々参加者は2000名を超す若者たちが集まった。その実行委員会に南部ブロックの代表として参加するようになり、東京全体の各企業から参加した仲間との交流が始まる。

東京23区や支部、近隣県等から代表者が集まり1000名の委員を目指して活動が進められていた。私もその委員に選出され会議に出るようになった。大きな会社とは言っても、狭い社会しか知らなかった私は、急速に大きな社会を知るようになり、仲間たちとの交流も深まる。遊び、お酒、麻雀三昧の暮らしから自然に、人生を真剣に考え

るようになり生き方を学び合った。そして、その時期労音活動のメッカであった北海道の函館に、東京を代表とする交流団員（30名ほど）選ばれ、夜行列車で玄関の函館に向かった。青函連絡船が函館港に着くと、函館労音の仲間が100名近く迎えに……。！それから、ホームステイでの1週間ほどかけての交流が始まる。人生が大きく変わる、函館での全国労音交流会でした。



地域に眠る埋もれた歴史 (85) 木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】 (11)

とりのこみち (1)

善徳寺 (常陸大宮市)

茨城県北部トリノコ（鷲子）道の周辺では江戸時代には和紙造りが行われ、それに適した三楹（ミツマタ）などの木もたくさん植えられていたのかもしれませんが。紙問屋も高部などの町にはあり、商人も行き来していたに違いない。

向け先は水戸の御城下で常陸太田などを通っていたものと思う。その時代の紙は貴重品であった。さて、昔の街道と思われる横道沿いに「善徳寺」という寺があり。入口には昔風の白壁の蔵造りの建物があった。

額光山善徳寺…浄土真宗本願寺派の寺院である。通りの入口をはいって川を渡った先に寺がある。



親鸞の弟子（二十四輩）の十二番「善念房」によりこの地より南の額田に近い南酒出に建立（建保三年（1215））された。

老松と山門がこの山間の寺の趣を感じさせてくれる。山門をくぐると整えられた美しい庭の木々が目に飛び込んできます。

この寺の説明によれば、善念房は久慈郡内田の領主「南酒出六郎義茂」となっており、この六郎義茂は佐竹昌義の孫であるという。

しかし、調べてみると二十四輩の善念房の寺はも

う一つあって、水戸市酒門町に「善重寺」（遍照山光明院 浄土真宗大谷派）がある。

こちらの寺伝では善念房は相模国の三浦義重という武士であったという。

さて、どちらが正しいのかわからない。

しかし水戸の寺とこの鷲子（とりのこ）の寺を比べるのは本意ではない。この山間の地に佇む寺を是非訪れてみていただきたい。ここに来ると安らかな気持ちで落ち着く事が出来る様に思う。



寺の本堂

南酒出より正和三年（1314）に鷲子に移り、延徳元年（1489）に火災に遭い、寛永七年（1630）に再建された。本尊は阿弥陀如来像。



太子堂

じっくりと眺めていたい落ち着いた寺であった。「道の駅みわ」などがある街道は観光バスもたくさん走っている、この寺のある1本南側の旧道はバスが走るには狭すぎます。ネットでもこの寺はあまり紹介されていないようです。本願寺派と大谷派でそれぞれ善念房の寺が違うのはまだよいけれど、この善念房の正体もよくわかりません。

水戸酒門町の善重寺の寺では相模国三浦義重という武士が鹿島神宮近くで親鸞聖人が川を渡るのに難儀しているのを負ぶって渡り、自身の悩みを親鸞聖人から教えをいただいた事になっており、三浦と言えはこの鷲子地区にある三浦杉の三浦大介義明（源頼朝を助け衣笠城で籠城討死）を思い出す。善念房は佐竹氏の孫であり新羅三郎義光（八幡太郎の弟）の一族になる。



太子堂入口の2本の柱を支える
木彫りの亀

鷺子にある善徳寺の本堂の右手に聖徳太子を祀る「太子堂」がある。

こじんまりした建物だが時代はよくわからない。江戸時代後期のものか？

本堂と同時だとすると1630年頃と言うことになるが、それよりは新しそうだ。

とりのこみち (2)

照願寺 (常陸大宮市)

十二番善念房の「善徳寺」を紹介しましたが、そのすぐ近くにある「照願寺」も紹介します。

毘沙壇山無為院(びしゃどうざんむいいん)、二十四輩の十七番 念信房。



照願寺入口

念信房は高沢伊加守氏信という高沢城主であった。高沢城と言うのはこの鷺子(とりのこ)地区の栃木県との県境の山にあった城だという。「鳥の子館」ともいうそうだ。

新羅三郎義光の子、高沢伊賀守がこの城を築いたと言われるが、その子孫である高沢氏信は稲田の草庵に自ら親鸞を訪ね、教えを受け念信房勝溪という法名を賜った。

最初は那珂小舟の毘沙壇(びしゃどう)(旧緒川村小舟)に草庵を建てたが三世の1300年頃に春丸(同じ鷺子地区)に移り、第九世の時(1390年)に現在の鷺子の城崎に移っています。

この十七番の寺も2か所あり、江戸時代の元禄年代に分割されたようです。もう一か所は千葉県いすみ市大原に本願寺派の寺院として同じ照願寺があります。



山門 (扁額に「毘沙壇山」とある)

この山号は、最初に建てられた小舟の毘沙壇の名前を使っています。

鷺子の照願寺の門のすぐ奥右側に古い桜の木があり、この樹は「親鸞聖人見返りの桜」と呼ばれているそうです。(市指定文化財)

この地(最初に草庵を建てた小舟)を6度も訪れたという親鸞聖人。

1228年に親鸞上人が訪れた時(56歳?)、まだ桜も咲いていなかったのに翌日帰るときには時期が早いにもかかわらずこの桜が満開になったのだとか。江戸時代に小舟からこの鷺子に移されたらしい。

本堂には、本尊の阿弥陀如来立像が置かれています。鎌倉時代後期から南北朝時代の作と考えられます。



本堂前の親鸞聖人行脚像
「俱会一処」(くえいっしょ)
と書かれている。

太子堂はこじんまりしていますが堂々とした風格のお堂です。この寺の敷地はすべて山の斜面にとりつくように造られています。



太子堂 (聖徳太子立像が奉られている)

このため、この太子堂や鐘楼なども全て斜面を削ったところに建てられたようです。

鐘楼には、「立教開宗750年 梵鐘並鐘楼復元記

念 昭和47年1月」とあります。

聖徳太子立像こちらにも鎌倉時代後期から南北朝時代の作と考えられます。県指定の有形文化財に指定されています。

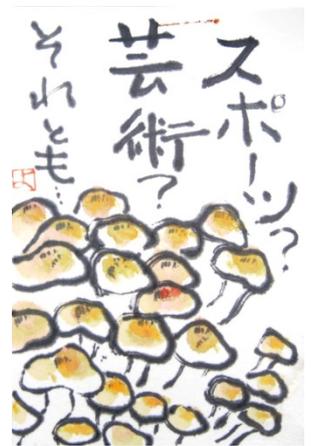
山門をくぐって本堂に向かう石段の途中にこの「宗圓寺」という寺がある。

同じ真宗の寺だが、徳川光圀の時に太子にあったこの寺をここに持って来たという。

この宗圓寺があつた場所は太子町の初原村で、明治22年の合併で依上村となり、翌23年に佐原村となったという。今の太子町の北西部で栃木県との県境に近い山間部である。

この寺をこの地に移した時に山門と鐘楼を移したと書かれており、今の山門はこの時のものかもしれない。

また鐘楼も基になったのは宗圓寺のもので、昭和47年に改修されたのだろう。太子町の奥の上金沢には親鸞の孫である如信上人終焉の地とされる「法龍寺」があり、光圀もこの寺の整備にも力を注いだとされる。
また宗圓寺はさらにこの北側にあつた。



(よしこ)

貴女からく私から

伊東弓子

貴女と別れた去年の秋彼岸。冬は唯、唯、耐えて過ごしました。明けて三月貴女は彼岸とはいえ蝶になって帰って来た初彼岸でした。伊那はまだまだ寒かったでしょう。天候不順の夏・新盆にも伺えず玉里の寺へお参りし、伊那の寺へ届くことを願いました。心重い日々が続く中、突然、信濃の路を尋ねる機会がありました。

伊那への道とは違いましたが、きっと貴女は不甲斐ない私の姿を盆あけでも何処かで待っていてくれたことでしょう。去年見た田も黄ばんできてました。今年も狭い土地で丁寧な作られている県民性を感じながら車から貴女を捜してみました。諏訪湖での昼食時も人の賑わいの中で貴女から聞いた数々の話を思い出し、現実の景色の中に天狗党の人々が想いを求めて通った足音、諏訪神社の祭りの威勢のいい姿、声を山々から冬の湖の水面に表われる“神わたり”の情景を忘れることなく伝えていって欲しいと願って通りました。午後の陽に紺色の富士の山が大きく見えました。でも貴女の姿は見えませんでした。誰にも話さず偶然の旅の中に、必然であったと言ひ聞かせて一人貴女

を偲んで送った夏でした。

秋の彼岸は貴女の一周忌でした。一年前は「会わなきゃ」と飛んで行ったのに、今回はみんなの同意も得られず一人よがりの自分を反省しながら、平常心を保ちながら過ごした一週間でした。もんもんとしていた所へ宝物と云っていい程の物が出て来ました。

だらしない儘では死んでも死に切れないと片付けを始めた矢先、潰れた箱の中から手紙や写真が出てきました。その一つ一つを区分けし始めると、貴女からの手紙が顔を出してきたのです。いろ褪せることなく日の目を見た喜びを語っているようでした。子供達、職場での写真や手紙と一緒に貴女から絵葉書、手紙、写真が出てきたのです。それら一つ一つを手にし、貴女との五十五、六年のお付き合いを綴った日記のようなものですから、だらしない結果にもかかわらず、雨にも濡れず、鼠にもかじられず、姿・形が整っていたことを有難く思います。

「いつ頃のものか」と、年月別に分けている中に切手の一つ一つに目がとまりました。葉書、封筒の角に貼られた小さなひとつひとつが生き生きとしていました。それは貴女がその都度、その都度心を込めて貼ってくれたものですね。記念切手、四季の物、日本・世界の絵柄さまざまですね。今回あらたに感動した思いです。

封筒の便りは手作りが多かったですね。きれいな包装紙を利用し、配色よく季節感溢れた物でした。そういう封の表の宛名、ご自身の名、実に丁寧な美しい字で綴られています。内容もいろいろでした。社会的に問題になった施設、仕事についても私と重ねて心配してくれたり、考え方を綴っ

てくれていました。花だいの運動のことも、

地域での活動に賛同の気持、基本的な考え方・意見をしるして下さったりしています。友が遠い所へ行く時、新しい所での生活に慣れる苦労を心配してみんなで寄せ書きをしました。実家へ行ってお母さんの看病の時、「私のことを娘ってわかってないのよ。」と淋しい文もありました。「つむぎ展」でこしらえ物を送ってくださったのですが、封ののりがはがれていました。儀間先生の百年回顧展の時の本をもとめなかったことを残念に思っています。「今なお、求めています、期を失ったことは返す返す残念です。」

葉書は殆んどなかったです。絵葉書が多かったですね。季節のもの、研修先・展示会・下調べに行った先の名所、名物の絵葉書必ず絵のついている楽しいものでした。古文書講座の知らせは葉書で、ご自分で書かれたデザインが勉強に行く楽しいお誘いとして、嬉しくいただきましたね。印象深い便りの中に婆さんが孫に乳を吸わせている絵葉書がありました。

“母恋し 泣きやまぬ子の 口元に
“持ちゆく我の 枯れた乳房を

わたしたちも婆さんの年齢になりましたねと、私の孫の病いを心配してくれたり、貴女が孫さんと菜を摘んだり、豆の皮をむいたりしている様子を知らせてくれました。

写真もありました。文書・古道具をいただきに行った先のご家族と写したものの、古文書の講座や御留川研究会で展示会や見学に行った時のもの、古文書調査の作業の様子、天気の良い日、庭での昼食時の写真と今は亡き人達のよい顔・よい姿が目に入りました。この人達を継ぐ人が何人いるか。

いやいな、捜さねば申し訳ないことです。そして娘さんから頂いたお二人の写真、ご主人の喜寿の祝いの時のものでした。戸隠化石博物館へ行かれた時のものでした。

全部で 葉書・絵葉書 三十一通

封筒入りのもの 二十六通

写真類 十六枚

そして千円札が一枚 何かの会費でもあったのか、寄附でもあったのか、とにかく無駄にせず、看板を立てる時の資金の一部に加えます。いいですか。又、たよりの中に、玉里の友が「由美子さんが玉里御留川のこと頑張ってくれてんだって、聞いたわよ。」というたよりもあり、人伝てに聞いたわよ。頑張つてねという一文をくすぐったい思いで見ました。これからも何処からか出てくるものがあるかもしれない。

「玉里から信濃へお嫁に行くの、故郷は玉里よ」と、別れたのは晩秋の頃でした。そして山々からの冷たい空気は、福井や玉里で経験しなかったくらい厳しいものだった言っていましたね。育った福井から玉里へそして信濃での生活、どんなにか悩みも多かったことでしょうに、聞いてあげることもなく申し訳ありませんでした。貴女の広く大きい世界と私の狭い小さな世界どこでボタンタッチできたのか、いつも思うのです。がこの地で沢山の人の人に支えられて生きてきた私が、貴女の崇高な目標の一部を受け取ることできたのでしょうかね。それは貴女との五十年のお付き合いの中で私が受け取ったものの一部でしょう。そして貴女を知っている仲間が力をかけて、力を出してくれているのです。

それなのに何故私の口から「御留川のことやっ

ていこうと思うのよ”やっっているのよ”と言いつせなかつたのか。自分の気がわからず・・・申し訳なく思っています。ごめんなさいね。どんなにか淋しく思われたことでしょう。

冊子づくりも今、ページの不足を補充してあります。一冊ずつとじる作業になると時間がかかるでしょうね。会員・役員一人一人が髪の白さが増し、背が丸まって、耳が遠くなったり、目が悪くなりました。足どりも力なくなり、活気が弱いのです。来春で十年、最後まで頑張っていけます。出来たら報告、お届けします。今はどこにいますか。

石岡の図書館で女性史つくりですか
西塩子で大幕の手入れですか
土浦の博物館で機織りですか
小川の古文書には見えてませんか

玉里の大場家に新しい文書が出てきましたか
かすみがうら市で講演会ですか
お願いされていた八郷町史編纂ですか
もつと遠くですか

便りを沢山書きました。読んでくださいね。貴女からの手紙や葉書は、私が持っていくますね。一つ一つを見ながら思い出話しをしましょうね。友も寄ってくるでしょう。

東城寺

小林幸枝

朝望山東城寺は土浦市の旧新治地区にある真言宗豊山派のお寺です。

寺伝によれば、延暦15年(796年)に桓武天皇の勅願によって、天台宗の開祖最澄が弟子の最仙を派遣して開山したといわれています。

当時のご本尊は薬師如来像です。山号の「朝望山」は「朝延を望む山」の意味で鎮護国家の思想が含まれているともいわれます。

隆盛を極めた寺でしたが次第に衰退した。広智上人が再興したと伝えられています。その後、小田氏の影響で真言宗に改宗となるのですが、広智上人伝説や坐像(鎌倉時代作・県指定文化財)が残っており関係の深さが伺えます。

戦国時代に織田信長についた佐竹氏と東城寺の僧兵が争いました。僧兵は敗れて多くの亡骸がこの地に葬られたそうです。



寺への登り石段は、デコボコしていましたが、とても美しく感動しました。東城寺のもつとも歴史を感じる場所だと思えます。大昔はかなり苦労したと思えます。苔で少し滑るので注意が必要ですが、東城寺の歴史を是非味わってみることをお勧めします。

風と共に

《理》(28)

大輪啓展



(さちえ)

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「新天地」

4月、10月は転勤の内示・半期の棚卸し等、私の会社で言いますと一つの区切りとでも言いましょうか。

長年一緒に苦難を乗り越えて来た、謂わば戦友達との別れと共に、新たに配属となったチームのメンバー、中途採用として全くの一人から一歩踏み出す人、新たな出会いのシーズンとも言えます。

今回は、ある男の仕事に纏わる、あくまでも独断的目線からの物語り。

今回10月の異動はその男にも訪れました。管理職になり数年、栄転として新たな勤務地に赴

く事になりました。

勤務地は茨城県内に多数の支店があり、その中で当然勤務地が変わる事は起こりうる事です。皆さんの職場はどの様に運営させられているのか、とても興味があります。

例えば、支店を異動するにあたっての引継ぎ等はどの様にされているでしょうか？

また、異動先での不安材料は何かありますか？支店を変える事で、業務内容に違いはありますか？？？

職場内の人間関係は如何ですか？？？

考えてみるといくらでも？は出てきてしまいます。

そんな中、少なからず最短昇進とも言われていますので、異動には、何かしらの厄介事を解決すべく配属される訳です。

と言う事で、今までにその男が直面して来た出来事を、少しの脚色と共に振り返ってみます。

遡る事数年前、自分では望んでいませんでしたが突然の栄転、これにより、これまでよりも大きな支店へと配属となり、職域の変更に伴い新たに一人からの学びが必要となりました。

そんな忙しいある日、ふと違和感を覚えました。なぜか、職場の雰囲気が良い、ピリピリしていると言うか、ギスギスしているというか、ですがそれを理解するまでに多くの時間は要りませんでした。

今の時代では難しい事ですが、所謂強力なパワハラと洗脳による、恐怖政治が水面化で起きていたのです。

ある人間は根底から人格を否定させ、罵倒され見せ物にされ、暴言を吐かれ、何も言い返せない様にした状況をその他にも植え付け、考える暇も与えない様矢継ぎ早に命令され、周りの人間は口を開く事もせず、ただ自分にその矛が向かない様子を潜め、傍観者としてその場にいる様な奴らの集まりとなっていたのです。

言葉は悪いですが、

「こいつら、頭おかしいじゃねえのか？」と思う程でした。

その当時は今よりも全体的にコンプラ意識も低く、当たり前の事として、その場にいた人達は受け入れていたのではないかと思います。

当時の黒上司も、そんな自分が脅かされる事態が訪れるとは、夢にも思っていなかった筈です。その男が異動して来るまでは、

その男は、異動後の違和感以降、突飛な行動を取りはじめました。

その職場は、2つの支店を兼務していた為、ある時間ある日程は黒上司が朝礼を終えると他の支店へと移動してました。そして、黒上司がいなくなった途端に男は、自分のデスクに足を乗せスマホゲーム等で突然遊び始めたのです。

勿論意図しての行動ですから、ただ 不真面目だった訳ではありませんよ？

そしてそんな日常を繰り返す事数週間、少しずつ密かに動き始めていたのです。

その男が何をしていたのかと言うと、突飛な行動をとった事によって、ひどく洗脳されている人を見分ける事、要は誰が報告するのを見ているのです。

当然、仕事中にそんな態度を取っている人間が栄転等あり得ませんから、事前に黒上司には相談し（誰が忠誠心を持っているか調べていたと嘘の報告をし）て、予め策は練っていた訳です。黒上司・残りの洗脳者全てを把握する試みの第一段目でした。

ここからの試みも、洗脳するだけの百戦錬磨の黒上司との壮絶な心理戦でした。続きは次月以降に。



(よしこ)

茨城県の難読地名とその由来(28)

木村 進

常陸国風土記と地名(3)

(六) 行方(なめがた、なめかた)

白雉四年(653年)に、(中略) 茨城と那珂の郡からそれぞれ八里と七里、合計十五里(七百余戸)の土地を提供して、郡家を置いて、行方郡とした。

行方郡の読み方は「ナメカタ」(現在の地名読みは…ナメガタ)と読みます。

常陸国風土記の地名由来説明は、

「昔、倭武の天皇(ヤマトタケル)が、車駕で国を巡り、現原(あらはら)の丘で神に御食を供へた。そのとき天皇は、四方を望み、侍従におしやつた。「車を降りて歩きつつ眺める景色は、山の尾根も海の入江も、互ひ違ひに交はり、うねうねと曲がりくねっている。峰の頂にかかる雲も、谷に向かつて沈む霧も、見事な配置で並べられていて、繊細な美しさがある。だからこの国の名を、行細(なめくはし)と呼ぼう」。行細の名は、後には、行方(なめかた)というようになった。と述べていますが、これも伝承であり地名の由来解釈はほかにもあります。

この郡家の場所は玉造の南部であり、現在明確にはされていません。

行方は、ヤマトタケル伝説がとても多いところです。

これはこの地が、周りの土地に比べ、大和朝廷の支配が少し遅れたと思われることに関係がありそ

うです。

この行方郡が置かれた西暦653年頃まで大和朝廷に抵抗する部族(風土記の中では佐伯、土蜘蛛などと呼ばれている)がいたのだと思われます。そのような背景を知ってからこの常陸国風土記を

読むと内容も理解しやすくなります。また古代陸奥国(現福島県)にも奥州行方郡(なめかたぐん)がありました。同じ呼び名であり関連性もあるかもしれません。

では風土記の行方郡に書かれている主な地名とその由来伝承を拾い集めてみましょう。

(1) 玉清井(たまきよい)…倭武の天皇(ヤマトタケル)が、清水で手を清め、玉をもって井戸をお褒めになった。これが玉の清井といわれ、今も行方の里にある。

…この玉清井は現在も残されています。またこの説明が「行方」の名前由来説明の直前に書かれており、行方の名前との関連を指摘する意見もあります。

(2) 現原(あらはら)の丘…倭武の天皇(ヤマトタケル)が登ってこの地を眺めた丘で、周囲から一際高く頭はれて見える丘なので、現原と名付けられたとなっています。

(3) 無梶河(かじなしがわ)…倭武の天皇(ヤマトタケル)が大益河(おほやがわ)に出て、小舟に乗って川を上られたとき、棹梶が折れてしまった。よってその川を無梶河(かぢなしがわ)といふ。とあり、元は大益河と言ったことも記されています。…現在の梶無川

(4) 鴨野(かももの)…無梶河をさらに上って郡境まで至ると、鴨が飛び渡ろうとしていた。天皇が弓を射るや、鴨は地に墮ちた。その地を鴨野と

いう。となっています。この鴨野という地名は現在の「加茂」ではないかと考えられています。玉造保育園に近い場所にある「鴨の宮」は、昭和2年に玉造郷校跡の少し離れた山の方から移転されたものです。

(5) 香取の神の分祀された社…枅(ます)の池の北には、香取の神を分祀した社がある。

…現在の側鷹【そばたか】神社と見られます。

(6) 提賀(てが)の里…この地に住んでいた手鹿といふ名の佐伯を偲んで名付けられた。

…現在の行方市手賀 佐伯というのは大和朝廷に抵抗していた原住民たちのことです。

(7) 曾尼(そね)の村…この地に住んでいた疎禰毘古(そねびこ)という佐伯の名から名付けられた。今は駅家(うまや)が置かれ、曾尼の駅と呼ばれる。…椎井池の近くの国道50号線の方に駅家跡の碑が置かれているが確定はされていない。

(8) 椎井(しい)の池…身の形は蛇であるが、頭に角があるという「夜刀(やつ、やと)の神」がいて、椎井の池の先の山に棲んでいた。この地が夜刀の神との境界で、この近くには香島(鹿島神宮)への陸路の駅道となっていた。…行方市玉造甲の愛宕神社付近

(9) 男高(をだか)の里…この地に住んでいた小高(をだか)といふ名の佐伯に因んで名付けられた。…現在の行方市小高

(10) 鯨岡(くじらおか)…昔、鯨がここまではらばって来てそのまま伏せて息絶えた場所。…現在の行方市鯨岡

(11) 麻生(あそう)の里…昔、沢の水際に麻が生えていた。その麻は竹のように太く、長さ一丈に余りあるほどだった。…現在の行方市麻生

(12) 香澄(かすみ)の里：古い伝へに、大足日子の天皇(景行天皇)が、下総の国の印波(いなみ)の鳥見(とりみ)の丘に登られたとき、国を望み、東を振り向いて「海にただよふ青い波と、陸にたなびく赤い霞の中から湧き上がるようにこの国は見えることだ」とおっしゃった。この時から、人は、「霞の郷」と呼ぶようになった。：現在の潮来市永山付近

(13) 新治の洲：香澄の里より西の海にある洲は、新治の洲といふ。洲の上に立つて北を遥かに望めば、新治の国の小筑波の山が見えることから名付けられた：現在の行方市の天王崎あたり

(14) 板来(いたく)の村：香澄の里より南十里のところに、板来の村がある。近くの海辺の渡し場に駅家が置かれ、板来の駅家という。また名前の由来については、建借間(たけかしま)命がやってきて穴に隠れた賊を策を立てておびき出し、皆殺しにした話と関連づけて、以下の4つの名前が書かれています。

・伊多久(板来)の郷：痛く討つ言った所：現在の「潮来」(いたく)

・布都奈(ふつな)の村：ふつに斬ると言った所：現在の潮来市「古高」(ふつたか)

・安伐(やすきりの)里：安く斬ると言った所：現在の潮来市古高にある「安波台」

・吉前(えささきの)邑：吉(よく)斬ると言った所：現在の潮来市(旧延方村)の「江崎」

(15) 当麻(たぎま)の郷：鳥日子(とりひこ)といふ名の佐伯が命に反逆したので、これを討つた。車駕の行く道は狭く、たぎたぎしく、悪路であったことから名付けられた：現在の銚田市当間(とうま)

(16) 芸都(きつ)の里：昔、寸津比古(きつひこ)、寸津比売(きつひめ)といふ二人の国栖(くず)がいた。寸津比古は、はなはだ無礼な振る舞いをしたので、一太刀で討たれてしまった。寸津比売は白旗をにかけて道端にひれ伏し、天皇を迎えたため、天皇は許した。小抜野(おぬきの)の飯宮に行くときに寸津比売は姉妹とともに引き連れ真の心を尽くして仕へたため、天皇はそれを愛しく思いこの野を「うるはしの小野」というようになった：現在の行方市内宿の化蘇沼稻荷神社あたり。

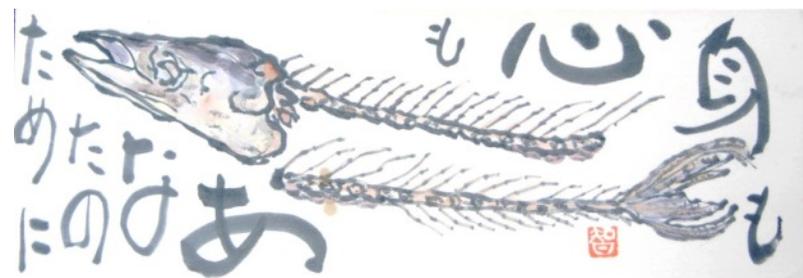
(17) 田の里：この地の古都比古(こつひこ)といふ人物が三度韓国に遣はされ、その功勞に対し、田を賜ったことからその名となった。(古事記や日本書紀に書かれている「三韓征伐」伝承と一致する)：場所は未特定だが現在の行方市繁昌付近か。

(18) 波須武(はずむ)の野：倭武の天皇の飯宮を構へ、弓筈(ゆはず)をつくろつたことから、名づけられた。：現在の行方市(旧麻生町)小牧付近

(19) 相鹿(あふか)：倭武の天皇の後の大橋比売(おほたちばなひめ)の命が、大和から降り来て、この地で天皇にお逢いになったことから、安布賀(あふか)の邑という(東京湾で入水して死んだ弟橘姫にこの地で再会した)：現在の相賀(あいが)山寿福寺跡あたり(行方市岡)

(20) 大生(おほふ)の里：倭武の天皇が、相鹿の丘前(おかざき)の宮に留まられたときに、膳炊屋舎(おほひどの)を浦辺に建てて、小舟を繫いで橋として御在所に通はれた。大炊(おほひ)から大生と名付けた。：現在の潮来市大生(大生神社)

(注) 風土記に登場する地名の現在地は明らかになっていないところも多く、推定地です。



(ちえこ)

【風の談話室】 《読者投稿》

やさしく暮らし (68)

さと女

午後の恒例散歩。季節が秋模様になってきた、汗の量も減り爽やかさが垣間見える日・・・。我が家から少し離れた栗山(我が家の元栗畑)に歩いて行くと、老いた栗の木から沢山のイガが落ち

ている。拾い集めると、何とバケツに3杯・・・栗の集荷場へ持っていくと、15キロ(6500円)もあり、臨時収入に思わずニンマリとした。

・50数年前にイギリスに渡り、現在はドイツでギター制作を行っているS・Kさんと息子のS・Hさん(ギター制作とギタリスト)・・・久しぶりの再会に話が弾む。八郷の柿岡に妹さんが住んでおり、そのお宅で待ち合わせをした。興味深いドイツでの話なども色々聞けて、大変楽しく時間も忘れ暗くなっていた。ここ八郷で二泊して東京のギター関係のイベントに行き、制作したギターを出展するようです。彼は世界的に有名なギター作家なのです。

・夢の実現に向けて頑張っている方の農園を訪ねた。1000坪近い土地で野菜づくりを・・・20種類近い野菜を栽培しており、そして主のいなくなった古民家を再生し、宿泊しながら農業体験が出来るような場所をつくりたいとの事です。畑の他栗林、梅林などの再生も引き受けたようです。みんなで野菜狩り栗拾いなどを楽しみ沢山収穫した。

・雨が降ったり止んだり、1日中どんよりとした天気。今日はリニョアル開店したピザ屋さん(Hanana)で3種類のピザを頂く。新オーナーは里山の保全活動などもしていて食材等にもこだわり若くてとても感じの良い方です。店内は小さなギヤラリーもあり庭を眺めながら頂くピザは美味しく最高だった。

・カラツとした青空・・・9月も今日で終わり。カレンダーも残すとこあと3枚。あの暑かった夏が懐かしい・・・。庭に出るとそこら中がキンモクセイの香りに包まれている、我が家の垣根は15本のキンモクセイに囲まれている・・・今が最盛期かな、まだまだ香りが楽しめます。沢山拾えた栗もいよいよ終わり、これからは、柿の季節に・・・辺りの柿畑はオレンジ色に変わりつつある。

・10月のある朝、荒れ放題になっている我が家の栗山へ草刈りに・・・。2反ばかりが雑草に覆われている、約2時間で何とか綺麗に・・・。ご褒美に「おかのファーム」へ食事に行くことにした、早速シャワーを浴び着替えて吉生へ！ 食後のジェラード(ナシのジェラード)が絶品だった。



(まさこ)

も関係はないが、こうして石岡に住むようになって、いろいろ昔のことなどを調べている。もう大分前(2010年)だが、藝文の12月号に茨城県の小学校22校の校歌が紹介されていた。その中に石岡小学校の校歌が紹介されていた。同校を卒業された方には懐かしいだろうと思う。また、戦時中に作られた校歌(国民学校)も記載があったので一緒に紹介させていただきます。

藝文のタイトルは「校歌の描く風景」特集号となっていた。そこには、それぞれの小学校の校歌と共に、その中に歌われている景色の写真や解説が載っていた。石岡は「石岡小学校」1校である。その紹介記事は「古代以来の歴史のまちに高まる郷土意識」とあった。

石岡小学校校歌

制定 一九五一年三月二十三日

作詞 大木 惇夫

作曲 細谷 一郎

一、筑波の山の 青雲に

望みをかくる わが学び舎

ここにはげみて いそしみて

明るき知恵の 人たらむ

げにもゆかしく つつましく

二、霞ヶ浦の 朝風に

稲穂はそよぐ わがゆりかご

ここにつとめて つちかひて

まことをつくす 人たらむ

げにもどけく たくましく

石岡地方のよもやま話

木村 進

(18) 石岡小学校校歌の変遷

私は生まれも育ちも石岡ではなく、茨城県に

三、恋瀬の川の 水清く

心をすずぐわがともどち

日ごとむつみてまどゐして

やすらい和む 人たらむ

げにもさやけくうつくしく

この校歌が制定されたのは昭和26年（1951年）である。昭和26年というのは終戦から6年後である。この校歌が制定されたのは、その前の校歌が軍国主義的な香りがして、戦後のイメージに則さなくなつたためと思われる。その前の校歌は戦時中の昭和18年に作られたものだといふ。当時は「石岡国民学校」と呼ばれていたときのものである。戦後生まれでも初期のうちはこの校歌がうたわれていたであろうから、年配の方は覚えておいてかもしれない。今の小学校の入口土塁の一番高い場所に当時は奉安殿なる石造りの小堂がまつられており、学校の門をくぐるときにこの奉安殿に最敬礼して入つたといふ。この奉安殿の中には昭和天皇の写真や教育勅語などが収められていた。戦後みな、GHQの命で取り壊されたが、一部で現存もしている。近くでは真壁の旧駅の近くに保存されている。

石岡小学校の奉安殿があつた場所には現在「常陸のみやこ・一千有餘年之地」といふ石碑が立っている。

戦中の校歌は時の文部省の認可を受けており、当時の事情を反映したもので、現代にはそぐわない。これを現代に合わせて新しい校歌を作つたといふ作詞の大木惇夫は広島出身で東海林太郎の「国境の町」などを手掛け、作曲の細谷一郎は茨城県の出身で多くの校歌を作っているといふのである。

芸文で紹介された内容では、旧校歌の戦時中は疎開児童を受け入れ3000人も生徒がいたそうである。今は250人を下回つてしまい、10年前より100人以上減つている。

昔国衙が置かれ、府中城として使われた敷地も度重なる史跡調査で運動会にも苦労したそうで、良いような悪いような？

茨城県新治郡石岡国民学校校歌

校歌認可 一九四三年八月十日

作詞 前田鐵之助

作曲 清瀬保二

一 筑波嶺はるけし 總社の岡に
連なり建てるはまなびのわがや
大和、勤勞、至誠、奉公
是ぞ石岡 不滅の訓
守りて集ふわがうれしさよ。
雄飛を夢みわれらは學ぶ
石岡 石岡 なつかし學舎
石岡 石岡 石岡 石岡。

二 飛行機飛び交ふ 霞ヶ浦に

近代文化の清筆を眺め

文武一体 心に刻む

是ぞ石岡 不滅の訓

守りて勵むわがたのしさよ。

御國の盾とわれらは學ぶ

石岡 石岡 なつかし學舎

石岡 石岡 石岡 石岡。

三 神寂ぶ總社の 社の岡に

府中の城趾を忍ぶまなびや

あふひの紋に 校名光る

是ぞ石岡われらのしるし

守りて睦むわがうれしさよ。

氣宇大らかにわれらは學ぶ

石岡 石岡 なつかし學舎

石岡 石岡 石岡 石岡。

飛行機飛び交ふ 霞ヶ浦に とあるが、阿見に予科練の飛行場があつたことは有名だが、石岡にも海軍石岡東ノ辻飛行場（現市役所の北側）や半ノ木に滑空訓練所があつたということも記憶に留めていてほしいと思う。ただこの軍国主義的な香りはどうしても好きになれない。二度と戦争がないことを願う。

まあ、私の卒業した小学校は東京多摩地区であるが、団塊の世代であり、急激に増えた生徒を受け入れるために新設され、私は記念すべき第一回目の卒業生となつた。これも良いのか悪いのか？



(ちえこ)

下士官の手記 燕石(えんせき)

(先月号からの続き)

大陸での日々 12 慰安所

×月×日

掘立小屋の隣には立派な日本家屋が建っている。部下から聞いたところでは、大阪に金持ちの主人がいて、女の一人に此処を任せているらしいということだ。時折海を渡ってやってきては金を持って帰っていくのだという。軍の許可は取ってあるという。

どうせ金を渡して話を付けたのだろう。

戦闘が激化して、暫く来ていないという。

「これらの女たちの多くは、二度と祖国の土を踏むことはなかった。また、慰安婦として満州や朝鮮や台湾の貧しい村々から女たちが、言葉巧みに騙されて連れてこられていた。中には無理やり連れてこられたものも少なくはない。この者たちももこうしたことは行われていたが、日本軍は殊にひどかった。「衛生管理」と称して軍医が性病検査にあたった。これら慰安所はすべて、主計、経理の管轄下にあった。当然、軍の管理下にある。植民地の住民などは、二等国民として扱った。親た

ちがこんな風だから、子供の間にも劣等国民と考えるものが多くいた。

やがて敗戦となり、これら植民地にいたものは、命からがら逃避行する羽目となった。頼みの軍隊は、高級将校を先頭に、一般人を置き去りにさつさと逃げてしまった。ましてや慰安婦を助けようなどというものは一人もいなかった。」

×月×日

来る日も来る日も慌ただしい任務に追われる日々だった。此処の通信隊は、人員が200人をはるかに超えてしまった。分隊を5個作った。さらに、陸軍から、通信の新兵の教育兵を20人ばかり押し付けられた。

内地から明日には、少年通信兵が30人配属になる。内地の本隊に無線で抗議した。どうせくれるなら、ベテランを、と。

「実戦で鍛えるのが一番だ。ベテランは近々大規模作戦があるのでそちらに回すしかない。出来るだけ援助するからそっちで面倒見てくれ。」と言ってプツリと切れた。

隣の陸軍師団も、更に奥地の侵攻作戦の為、大半が出動して、1個中隊ぐらいの兵力の留守部隊だけである。相談に行っても却ってこちらの戦力を頼みにされる始末。

実際、兵員は、歩兵1個中隊を上回る。銃器も、重機関銃、擲弾筒、迫撃砲。無線機輸送用の、トラック数台。軍馬が20頭。歩兵大隊半分程の実力がある。この辺りは元々、匪賊が支配していたが、大頭目は一応親日という事になっている。が、

幾つも有る中小の匪賊は、金で幾らでも寝返る。現にこちらか何度も襲われ、小さな分掌の幾つかは、全滅している。そんな中、1個中隊半の兵力は、この辺りでは一番だ。

×月×日

始めに来た少年兵は、今や立派な小隊となって、俺が指揮し無くとも、小規模の匪賊など蹴散らしてしまふ。今やここ、D鎮がここで一番安全なところとなっている。日本の居留民も続々と集まってくる。中隊扱いという事で、立派な兵舎を独占している。

いつまでも金や物資が続くわけがない。黄さんとも相談して商売を始めることにした。商売などやったこともないから、姑娘愛々を頼ることにした。

このあたりでできる麦を買い付け、戦渦に巻き込まれていない大都市へ送る。いつかの山の村では、炭を焼かせ此れも運ぶ。幾つかの大小の河川・湖で採れる川魚も、干物にして運ぶ。代わりに、工業製品を仕入れてくる。余った儲けは隠しておく。

×月×日

こちらで、付近の匪賊を、徹底的に叩いておかなければ、いつ寝首をかかれるかわからない。

制裁を加えるのは、残酷なようだが、頭目たち少数の者は、村の者たちから、とれるだけのものを搾り取っている。体も奪い、娘も奪い、好き放題だ。こいつらが制裁を受けるのはいわば自業自得だ。部下の者たちにもこの点を訓辞して、同意を取り付けてある。

黄軍属が、おりにふれて古い昔からのこの国の、歴史を教えてくれた。

負けたC屯の者らも大勢連れてこられた。敗れた者たちは、否応なく奴隷の扱いをされる。女たちは、奴婢以下の性奴隷だ。

B頭目と相談して、C屯の者たちと参をはじめ幾人かのものを貰うことにした。

意外に少ない分け前の申し出に、意外だ、という顔をしている。

A屯の老いた長老など何の使い道もない。C屯のC頭目も老いている。財物も、少しだけしか貰わなかった。

「大人は欲がないな。」という。

「貸しにしといて、もしも、日本軍が負けたら、そのときは助けてくれよ。」

「あつははは。大人は、面白い。冗談がうまい。」すっかり上機嫌である。

A屯に来る途中に、廃村があった。C頭目以下を其処に住ませた。とりあえず、井戸もあるし近くには川も流れている。荒れた畑も何とかなるだろう。みんな感謝している。それはそうだろう、あのままなら、ほとんど命がない。

あるいは着のみ着のまま荒れ地に放り出される。少しの武器も置いていくことにした。部下のほとんどを本隊に帰す。この場所は、A鎮と言ったが、戦乱で無人となっていた。三つの屯とほぼ等距離にある。いざというときはここを拠点にするつもりである。

日本軍などは、これっばかりも頼りにしない。

×月×日

周りを調べたりして何日かたってしまった。C頭

目についてきた者達が、せつせと綺麗にしたので、見違えるようになった。本隊から、こっそり物資を運ばせる。一人であれこれやったのですっかり疲れてしまった。C頭目は、すっかり気落ちして、只の老いぼれになってしまった。ここは、あの長老に任せる事にした。C頭目の後室の者たちは、初めのうちはA屯の者に聞いたのだろう、すっかり怯えていたが、何もしないと分かると少し安心したようだ。一人幼い女の子がいたので、暇があると遊んでやった。幼いので怖くないのだろう。折り紙を教えてやると、喜んで、毎日来ては纏わりつくのだった。母親たちは心配げである。俺もこれだけ恐れられているのかと思った。

×月×日

娘と遊んでいると、母親が入ってきた。

「心配するなよ。こんな子供に手なぞ出すものか。B屯にも、A鎮にも沢山女がいる。親だから心配なのだな。」

「・・・」

「一緒にお茶でも飲もう。」

テーブルにお茶と菓子を用意させる。三人で菓子をつまんだり、茶を飲んだりする。ようやく警戒心も薄れた様だ。日本でのお茶の飲み方はこうだ、と教える。日本の事をいろいろ聞きたがる。長老が気を利かして、酒と肴を運ばせる。

「付き合ってくれ。」

二、三杯飲む。いつの間にか夕暮れだ。娘は居眠りしている。夕食が運ばれてくる。この二日ばかり前に、姑娘が来てご馳走を置いていった。それを料理したのだろう。久しぶりの料理に、帰ろうかどうか躊躇している。

「娘と一緒に泊まって行けよ。」

意味するところは一つだ。C頭目はもうなんの力もない。A屯の長老も、老人だし然も、女には興味がない。参はまだ少年だ。ここへ入ってきた時から半ばそうなると思っていた。いや期待していた

娘のことは表向きの口実だった。C頭目には、正室をはじめ、家婢をいれれば何十人も女が仕えていた。

女はほんの一、二度、御手付きになって、その後はぱったり訪れが途絶えた。一つには正室が異常に嫉妬深かったこともある。

子供を一人生んだことで、たちまち用済みとされたのである。もしも気に入られれば、この前来た姑娘のように、大事にされるだろう。自分にはとてもあの姑娘のような才覚はない。

あとは採る方法は一つだ。ざっとこんなことなんじゃないだろうか。

途中から、どんどん杯を重ねている。娘を長椅子に寝かせ、自分の上着をかける。

大陸での日々 13 作戦

×月×日

内陸の遙か奥で、大掛かりな作戦が始まった。いくつもの陸軍師団が、続々と集められている。

朝鮮や、満州に展開していた師団も、呼び集められている。数十万の兵隊が、動いてゆく。初期のころから、中国大陸にいたということで、新しく展開する部隊との連絡が、大変な量になった。

実質数十倍になった。手持ちの人員機材ではとても足りない。いつの間にかベテランの一人となっていたわけだ。

かなりの実績も上げてきたから、奥地の大部隊の支援に向かえということになった。あの、M大佐が呼び寄せたらしい。代わりに来た将校に引き継ぎを済ませ、一個分隊の部下とともにトラックに飛び乗った。

×月×日

幾日も、黄土の中を進む。黄先生に教えられた、古い遺跡もいくつか通り過ぎる。前線に近づくと、連日のように銃弾を浴びる。途中からは、もう日本軍の支配などは及んでいない。

大きな部隊が駐屯している周囲だけが安全地帯だ。一步でもそこを出たらまず命がない。ここは敵国、しかも真つ只中なのだ。参謀などという将校たちが、わかったような顔をして、いい加減な作戦を立てる。そのたびに大きな犠牲が出る。死んでゆくのは、大部分が兵隊か下士官だ。今度の大作戦は、

「××打通作戦」というそうだ。

(名前はいつでも結構だが、一度でもいいから、お前たちが弾の飛んでくる最前線に立つてみるよ。若い部下が死んでいくたびに、そう思った。)

もともと何年にもわたって、大きな軍閥や、国民党軍、共産党軍が互いに入り乱れて、時に戦火を交えている複雑なところだ。そこに日本軍が割り込んだというわけだ。

×月×日

中隊規模のトラックでの移動だが、所々、川に橋もかかっている。とつづくに破壊されている。そこでしばらく足止めだ。廻りの風景も、沿岸部とはガラッと変わってしまった。連れてきたのは、

えりすぐった者ばかりである。

半数は、銃器の扱いがうまいものを選んだ。一緒にいる陸軍中隊など、全く頼りにならない。

聞けば、朝鮮、満州などから寄せ集められたにわか仕立ての混成部隊で、最前線では兵員の消耗が激しくて、補充として来たのだ。指揮を執る中隊長のN大尉は、退役まぢかの老兵だ。こっちにしてみれば、素人である。

取敢えず、前線に送る、通信分隊の警護ということも兼ねた任務だとか。装備もろくな装備ではない。こちらは、経験もあり、装備も、下手な中隊ぐらいい持っている。

自然と、実際の指揮は、自分が執るようになった。中国語もろくすっぽ話せない、使えない連中ばかりだった。

×月×日

行軍が遅々としてはかどらない。同行している中隊が、足を引つ張っている。

×月×日。

向こう岸も見えない、大きな川に行き当たってしまい、しばらくの間足止めだ。工兵隊の到着まで数日はかかるという。一個中隊ぐらいの規模では、ろくに相手にしてもらえない。このままこでぐずぐずしていれば、命令された日時に間に合わない。

くだんのN大尉に相談したが、さっぱり打ち明かない。近くの集落に分屯するにしても、すべてこちらがおせん立てするしかなかった。

×月×日。

無線機を稼働させて、A鎮と連絡を取る。舟艇を、十隻ばかりと、人員を送ってくれと頼む。黄先生のこと、詳しく言わずとも、こちらも状況はだいたいわかっている。

×月×日。

中隊の幹部たちは、こちらのやり取りをただ黙って見ているだけだ。

当番兵が来て、

「匪賊が訪ねてきてますが。」という。

「ああ、それは知り合いだ、通してくれ。」

B頭目だ。

「大人、久しぶりだ。」

「よく来てくれた。早かったな。」

「変な形の船は二、三日したら着くよ。」

外に出ると、武装した二〇〇人ばかりの男たちが、馬上で並んでいる。顔を見るなり、一斉に歓声を上げる。

新米兵たちは、初めて目の当りにする、馬賊たちに、目を白黒させている。しかもこちらの若い軍曹は、頭目と並んで、閲兵している。

×月×日。

舟艇がいたので、ようやく向こう岸に渡れた。中隊は、ろくに礼も言わず、さっさと乗り込んで川を渡って行った。部下の若い兵士たちは、カンカンになって怒っている。

「なんだあいつら。ふざけやがって。」

「誰のおかげで生きてられると思ってるんだ。」

と口々に言う。

「まあそういうな。あんな連中だって、敵が来たら少しは役立つ。我慢しろよ。」

漸く大河を超えたと思ったら、次は山だ。奥深さが、内地とは大違いだ。行けども、行けども山また山だ。切り立った崖が何処までも続く。時々人馬が荷物もろとも崖下に落ちる。助けようがない。輜重隊の供給はもう全く追いつかなくなつた。あまりの進撃の速さと、屢々匪賊に襲われるためだ。

無線連絡しても、携帯してきた移動用五號無線機では、どうしても性能が劣りしよつちゆう交通不能になる。食料の補給はいまや馬賊達だけが頼りだ。姑娘の商団も、ここらではまだ力がなく連絡もままならない。武力か、金か。どちらかがないとこの辺りでは生きてはいけない。

×月×日。

夜、どこからか男が現れて、

「大人、阿片を買わないか」という。

「麻薬は扱わない。」

「大人なら大もうけできる。」

「金はいらぬ。」

と追いつく。裏社会の男だ。

わたしが金も武力も持っていることは、ここらあたりまで広がっているのか。巧く取り入ろうとでもいうのか。

×月×日

最後の峠を越えると、大きな盆地に出た。かなり大きな集落があり、その廻りは高い石垣で囲われている。

少しばかりの砲撃ではびくともしないだろう。

このあたりの中心である、Y鎮だという。名前だけは知っている。

×月×日

ここの一歩の有力者に招かれる。中隊長と2名の将校、それと私の4人だけだ。屋敷はこれまで見た中で一番大きい。小さな王宮のようだ。先生から聞かされた、三國志の世界に迷い込んだかのような。今にも扉の陰から英雄たちが、現れてくるかもしれない。歓迎の席は、全く豪華なものだった。大勢の者が席に座っている。着飾った女たちが忙しく出入りして、客に酒を注いだりしている。西域の薄物を纏った女達が、美しい肢体も露に音楽に合わせて妖しく舞い踊る。

広い卓には、食べきれない程たくさん料理が後から後から並べられる。強い酒で何度も乾杯が繰り返される。この頃は、飲んだふりをして巧みに酒を棄ててしまうことにしている。でないとしても体が持たない。宴が終わると、寢室に案内される。何時ものお決まりのコースだ。やがて、扉が開き、女が一人か二人入ってくる。そのあとに待っているのは、言わずと知れた、肉の交歓である。

「是だけ豪華なんだから、今日はどんな嗜好が凝らされているのだろう。」

煙草を吸って楽しみに待つことにする。甘ったるい匂いが部屋中に立ち込めている。

×月×日

どれほどの時間がたったのか、ぼんやりと目覚めると、がんじがらめに縛られて、床に転がっていた。僅かな灯りがともされている。どうやら右造りの物置か倉庫のような処だ。さっきの宴会の飲み物か食べ物に眠り薬が入っていたのだろう。或いは、あの甘い匂いは阿片のものだったのか。

体を動かしたので、枕元に座っていた兵士が立ち上がって、外に呼びかけた。扉から入ってきたのは此処の王・棟梁と、その家臣らしい男達、それになんとB頭目だった。

「目が覚めたようだな。」冷たい目をして言う。

通訳の男を介して、尋問が始まった。察するにここは牢屋か、拷問部屋のような。随分と残酷な拷問があると聞いている。

「A屯の隠し金の場所を白状すれば命は助ける。」という。

目的は是だったか。B頭目を信じ切っていたわけではないが、向こうの方が上手だったようだ。白状したところで、命は助かるまい。もう長くて数時間の命だ。全くの油断だった。これまで、身の安全には注意を払ってきたつもりだった。人一倍頑健に生まれついたから、性欲も強いのだろう。性病が怖くて、淫売宿には近づかなかった。戦地に来てからも、注意を行ったため、性病にかかって廃兵になるものが多い。陸軍病院では、こうしたものは碌な扱いがされない。看護婦たちもこれらの患者は嫌っていた。末期の患者はもう廃人であり、ろくな治療もされない。最後は悲惨である。病院では、これらの者のことも見聞きしたからなおさらのことだ。

所謂「突撃一番」とか「鉄兜」と呼ばれていた、

サックもろくに使わなかったのに、こういった病に一度も感染しなかったのは、幸運だったのだろう。あるいは後で罹った原因不明の病は、一種の性病だったのか。危険と隣り合わせの最前線では、ちよつとした油断が命取りだ。いつもピリピリと神経を張りつめていなければならぬ。

自分だけではない、部下や仲間の戦友たちの命

もかかっている。戦場という異常な状態のもとでは、良心すら麻痺してしまう。ついさつきまで話をしていた戦友が、次の瞬間には息をしていない。死体や瀕死の人間など、今日までいやになるほど見てきたはずだ。そこでは、一人の人間の生き死になどは軽いものだ。ましてや、他国の者のことなどに斟酌するはずがない。今までは、本当に幸運に恵まれて順調だったのだ

今こうして、B頭目の顔を見ていると、今更のようにわかる。そもそもの始めから、こいつは、自分を利用し、こういう機会が来るのを待っていたのだ。例の隠し金の事を、A屯の誰かから聞いたのだろう。或いは、脅すか、拷問によって聞き出したのだろう。

この、王鎮の王棟梁にあらかじめ連絡して、俺の来るのを待ちかまえていたのだ。女たちとの快楽に溺れ、注意を怠ってしまった。自分の馬鹿さ加減に腹が立ったが、もう諦めるしか仕方がない。

こんなことならせめて部下たちの幾人かだけでも連れてくればよかった。B頭目が反旗を翻したとなれば、このあたり数百キロ一帯で頼りになるのは、20名足らずの部下しかいない。くだんの護衛中隊はあてにならない。

壁にぶら下がっているのは、まがまがしい拷問道具だ。

「わかりにくい所に隠してあるので、実際にそこまで案内しよう。」と、言うつと、
「ふふ、そうはいかないね。途中で逃げるだろうから。この紙にありかを詳しく描けよ。もしそこになかったらそれまでだな。」

相変わらず冷たい目だ。宴会の席では、にこやかに話していたが、今のこれが本性だろう。笑い

ながら人を殺す。とりあえず時間稼ぎにはなった。

×月×日

ろくに食事も与えられない。一日一個の饅頭と水だけだ。生かしておくだけというわけだ。「饅頭」というのは、パンみたいなものだ。普通はこれに野菜や肉、スープなどが付く。勿論持っているのはすべて取り上げられ、着せられているのは、半ば破れかけたぼろぼろのきれだ。何かというと、銃床で殴られた。水と食料もない時がある。

×月×日

そろそろA屯に戻ったものが帰ってくるころだ。大小便の度に、縄をほどくのが面倒になったのだろう、部屋の隅に大きな木の桶を置いて、足に鎖をつけ、目隠しをされて、壁のわっかに繋がれた。

×月×日

ここまでの往復だからかなりの時間がかかる。見張りは、交代で銃口を向けている。これでは逃げ出す隙が無い。

×月×日

腹が減って堪らない。体力はそろそろ限界だろう。幻覚も浮かび出した。白昼夢というのだろうか。これまで関係した大勢の女たち。入れ代わり立ち代わり、妖艶な支隊で現れてくる。それとも、あの麻薬の作用がまだどこかに残っているのだろうか。陸軍病院で意識がなかった時、長い、長い夢を見ていた。大半が故郷の少年時代のことだった。

村の学校には、代用教員が幾人かいた。中の一人は、隣の女学校を出たばかりだから、ようやく

く、17歳ぐらいだった。とても可愛らしくて、見るたびにドキドキして、あれが初恋に近いものだったのだろう。

×月×日。

もう、幻覚と現実の堺がわからなくなった。目の前にあるのは、温かい湯気の立つ、白い飯だ。猛烈に喉が渇く。何事か喚き散らしていたらしいのだが、監視の兵士も、面倒なので知らぬ顔である。時には、夢うつつで、女たちと交わっている。

(続く)



(ちえこ)

【特別企画】

打田昇三の太平記(26) 卷第十二 一

平治元年(西暦一一五九年)十月、平治の乱に敗れた源頼朝少年は捕らわれて処刑されることを平清盛の継母に救われ、伊豆へ流罪となる。

その監視を命じられていたのが地侍・北条時政であり、時政の長女・政子は実母が病死し父が再婚して妹が生まれた為に、何と無く微妙な立場に居て、孤独な頼朝に同情する。頼朝も成人し将来を考えると孤立無援の状態では居られない。必然

的か偶然か、頼朝と政子は結ばれた。

其の頃、平家政権にも翳りが生じて来て、元来は源氏の地盤である東国では地方武士の間に平家不満の声が出てくる。治承四年（一一八〇）八月、北条氏らを味方に付けた頼朝は無謀とも思える挙兵をして石橋山に籠り見事に負けた。

是で終わると日本史もつまらなくなるのだが、反平家運動が徐々に効果を上げたので源頼朝も思いがけず征夷大將軍になれて鎌倉幕府を開いた。然し、資本力が弱かった所為で源氏も僅か三代しか持たず、株券を持っていた政子夫人の実家・北条氏が「棚から牡丹餅」どころか「倉から米俵」のような幸運で権力を手に入れたのである。

北条氏は鎌倉幕府要職を一門が独占して百五十年ほど粘ったけれども、根が伊豆の地侍に過ぎ無いかから長い間にはボロが出る。其処を楠木正成・新田義貞・足利尊氏（途中から転出）・名和長年など夢と希望に燃える武士たちが狙って潰した。

此の章段は、（十一）に続き新田義貞の鎌倉攻めに関わる話から始まるが、攻められた側の最後も詳細に伝えている。戦記は勝者の一方的な記録になり勝ちだが、さすがに「太平記」は敗者側のことも良く伝えていくるので有難い。

○鹽飽（しあく）入道自害の事

現場が海岸近くのので「塩」に関わる登場人物も多いのか？前項の「鹽田父子自害…」に続いて鹽飽さんも同じ事をする。

新田義貞の軍勢に攻め込まれ壊滅状態となった鎌倉の幕府本陣で、重臣の鹽飽新左近入道聖遠が後継者の三郎左衛門忠頼を呼び「…諸方守備に回った味方は破られ、御一門（主家・北条の方々）

は自害されたと聞く。私も後を追うが、お前は養子なので北条氏に恩は無い。生き残っても不忠者と云われる事は無いので何処かに身を隠し、出家して私の供養をしながら穏やかな生涯を過ごして貰いたい…」と涙ながらに言った。

聞いた忠頼は涙を溜め暫くは返事をせずに居たが、やがて「…お言葉は御本心と思われませんが、此の忠頼は未だ直に北条家に御奉公は致して居りませんが、鹽飽家の者として主家（北条氏）の恩を受けております。其の大事に当たり難を逃れて天下に恥を晒すことなど出来ましようか。父上が切腹されるならば、お伴を致します…」と言いつつも終わらずに短刀を抜き、腹に突き立てて死んだ。

是を見た弟の四郎も切腹しようとしたのだが、左近入道が止め「…順序が違う。私が先に逝くのを見届けてからにせよ！」と命じてから、笑いながら中門に法事用の椅子を置かせて座り筆記具を手「吹毛を提持して虚空を截断す。大火聚裏、一道清風」と書いて四郎に渡し「我が首を打て！」と命じた。四郎は涙ながらに父の首を斬ってから、其の太刀を取り直して、自分の腹に深く刺した。是を見た三人の家臣が走り寄り、其の太刀を用いて順序良く自害をしてしまった。其処迄しなくても…と思う者たちの最後である。

○安東入道自害の事、付、漢王陵の事

「入道」は仏門に入った武士が使う称号であり、正式名称は安東左衛門入道聖秀と言う鎌倉の重臣だが新田義貞の妻の伯父さんになる。義貞としては攻め難いから妻に書状を書かせ、其れにサインして「降伏するか逃げるか」を勧めたのである。

其の手紙が届く前に、安東は三千余騎を率いて

稲瀬河へ向かったが新田軍の別動隊に破られて多くの兵を失い、自分も傷を負って館へ引き挙げた。しかし館は既に敵に焼かれており家族などの消息も分からない。更に幕府本部も壊滅状態で主君・北条一族の行方も不明と聞いたので「…家臣一同が切腹したのか？」と思い、辺りを入念に探させただけでも其の様子が無い。

其の報告を聞いた安東は「…悔しき哉、日本国の主、鎌倉殿が年来、住まれた場所を敵の馬蹄に掛けさせながら千人、二千人と討死する者が居ないとは！是を後の人々に嘲られることこそ恥辱である。かく成る上は、いずれ死ぬべき命なれば鎌倉殿の最後の場所を突き止め、其処で心静かに自害して鎌倉殿の御恥辱を雪（こそ）ごう…」と生き残った百騎ほどを従えて小町口へ向かった。通常ならば出仕の際に馬を下りる場所なので習慣で下馬したが辺り一帯は既に敵に焼かれていた。

果然としているところへ、新田義貞夫人の使いと称する者が、それらしき手紙を持って現れた。開いてみると、遠回しな表現だが「降伏」を勧告する内容である。身の安全は保証すると書いてあるが、頭の固い安東は怒った「…古代中国で漢の高祖と楚の項羽が戦った際に、漢の武將・王陵は護る城が落ちなかつたので、楚軍が王陵の母親を捕えて楯の前に縛り付けた。是で王陵が降伏すると思つたのだが、母親は自害してしまつたので王陵は悲しみに耐えて名を上げることが出来た…」其れを思えば、今、自分が置かれた立場で其の意志を変えられない…ことを、なぜ分かつて下さらぬか！と恨み、其の使者の目前で手紙を持った手に太刀を握り、腹掻き斬って自害した。

（続く）